

S. U. A. C.

1966.9 55,56合併 夏山合宿報告
信州大学山岳会土田山岳部

目次	頁
1. 夏山合宿総括 -----	1
2. 計画概要 -----	2
3. 行動概要 -----	3
4. 岩登攀記録 -----	4
5. 縦走記録 -----	8
6. 係反省 -----	11
7. 係報告 -----	12
8. 秋山計画 -----	13
9. 第2回全国登山祭典参加報告 ---	16
10. 登山愛好者へのよびかけ -----	18
11. 部活動を発展させるために ---	19
12. 遭難対策費中間報告 -----	20
13. 連載、何のため、誰のため山に登るか ---	21
14. 1966年度予算計画 -----	22

総括

〇〇 〇〇 〇〇

〔五〕 省会を以て、合宿その考を終えた。残る当はここに併せて深い談話に序
部、今後実践課題も結びつけて、部活動方針の正しさを絶えず検証しながら
我々をこえざる困難を一つ一つ解決してゆくことである。

〔計画〕 通りの合宿を以つた。

各自が与えられた登攀ルートの研究に当り、必然的に自主的トレーニング形態が
生まれた。それによって事故のない安全な登山はあらゆる登攀内容に於いて(我
部史上に輝かしい功績を築くことができた。(注: 過去7年間、定着合宿で計画通
り実行し得たという例は、現分かつてはかつてそうである。)

合宿の企画性がどんなに大切なのかという本質を明快に実証したものである。
そういう点で非常にすぐれたもので他と区別して理解することができよう。

〔定着〕 合宿は10日間位が適当である。

合宿に参加できないもの(主に経済的・家庭事情)や参加して(非常に無理をし
ているもの(経済的、時間的に)が最近じみに増えた。この言葉に全員が共感を
覚えるはずである。物価値上り、公共料金(交通)値上りで山に行くごとに合
宿費は高くなって行く。うまいものを食べられないことから、体力は減退し、疲労
感厚く理われてくる。合宿中、陽しをうまくしるじか、暖水が扱はな山ほど
じ口でさらされたのは決してゼイタクにほったからではなく、物価が高いため
に、そうならざるを得ないからである。

以上のように経済的、時間的、合宿中の疲労限界(安全に活動できる範囲)等の
諸点に基づき、我々の合宿期間を10日間位が最も適確であると思われた。

〔その他〕 ルートファインディング技術や、スピードをつけて登る一連の技術に
ありありと欠陥を見出し、これがゲレンデばかりに頼った練成に原因がある。
(必ずしもそうではないが)ことを指摘した。これは明らかに大きな示唆であり
啓蒙であった。そこで、我々ほ少な々をここれらの点を考慮して今後の活動訓練
をすみやかに算出してゆく必要はない。

〔その他〕 細かなことは、理論学習、雪上訓練、冬山偵察などが充分遂行し得
なかった。理論学習は大学祭に登山教室を南かんがため準備であり、雪上訓練
冬山偵察は冬山への第一歩であった誤である。

しかし楽しくうたを歌い、上下間の差別なくゲーム(トランプ)をし、部内の民
主化を更に強め、OB、OGの技術、教養を高揚と親睦に果たした役割は、限りな
く大きいと言わねばならない。

〔我々〕 合宿にも必ずある経験を待っている。今合宿はそれ例外ではない。
ここで得た得物は以後恒例として存続し、早く得に知識、経験を正しく生かす
べく努めなくてはならない。

〇〇 〇〇 〇〇

2 場所 掛川(境古、前穂乗陸、屏風)

3 参加人員 西村紀雄 佐々木央郎 轟良明 河原洋 池内寛幸

森田祐吉郎 小宮良雄 石川税子

縦走-河原洋 杉本敏宏

我部をよりよくするために!

—その①. 自覚せよ!—

月報の製作にあたり、物質的、精神的な様々な矛盾に自覚めた某部員が私に忠告(?)してくれた。それによると「我々は他人を批判する程、また部内が充実してないんじゃないか」と。「他人のことよりまず自己批判をせよ」①山に対する勉強不足が目立つ。更に、家族的になりすぎ、互に「批判」しにくく部の欠陥を指摘した。彼は「最近になって、ようやく自覚してきたようで、喜と言って居るように、上述の発言は、自覚し始めた者がはじめて、いたく疑問だ。〈疑問〉が考える糸口であり、知識の第一歩であり、やっとそれが原動力となって、活動かが始まる。

①にしる②にしる、言われてみなくては、まさにその通りなのである。もし、リーダーである私か①をし②を実行したら、部内が充実してくると云えるだろうか。人生には、先を見越す能力が非常に大切なものであり、「おさまくら」式の世間たりか、いかにも危険なものであるかは、皆、よく知っているのである。同じく、我々の活動も、先の見通しのつかぬ活動であってはならない。「人生論と部活動は全然、別のものですよ」という者が、いさか知らぬ。しかし、又、それも、我部のユモラスな一面である。

我々のように、少ない部員を動かし、部活動を維持し、ゆくゆくは何か一番大切なものか、その本質を暴露するならば、「部員一人ひとりの自覚ある行動」を呼び起すことだと云えよう。①の「他人」を批判することは、即ち「自分の心の内」を批判し、自分はその誤り(自分の経験から生じた誤り)を繰り返さないようにと、心のすえとしての発言を行うものであり、それが彼自身②の発言として現われてきて居る。それが又、他人の心を忠実に刺激して居る事實は、私自身、実感として、とらえることができる。

私は、そういう勇氣ある忠告に、我々の方針(月報の中で①のような「疑問」を生じさせたこと etc)が正しかつた(自覚させようと努力してきた、その効果があらわれ始めた)と、ますます勇氣つけられて居る。現在、我ら部員には、上からの命令を割当て式で、忠実に実行し、事務的に、コトを処理すれば、それでよい。それが「自覚」して居る証拠として、あると考へて居る者が多い。今日は、自覚症状が部内に起つた、あると、いふ苦報ととどめておこう。(記 佐々木)

次回は、その②「我々は、今、何をたし、いかに具体的な活動についで」をとりこす

3. 行動概要

- 8月5日 上田発8:10、松本にて南アルプス縦走を終えた池内と合流し、上高地 Summer Tent に入る。
- 8月6日 涸沢に入る。後半皆バテ気味。
- 8月7日 ドーム北壁(佐々木・稟)、水野クラック(河原・池内)、小宮氏帰来天。
- 8月8日 茅一尾根(小宮・河原)、森田、岡村両氏、長野の市野殿の助けを借りてたどりつく。
- 8月9日 P₂フランケ右(早大)ルート(岡村・稟)、クラック尾根(佐々木・河原)
- 8月10日 小宮氏帰る。万才三唱にて送る。
- 8月11日 石岩稜(岡村・佐々木)、北尾根(稟・池内) C・B・A フェース(森田・河原)
- 8月12日 ドーム正面(石川・稟)、河原縦走のため Summer Tent まで下る。
- 8月13日 屏風岩、東壁、雲稜ルートに、茅3 party 目に取りつく。突然の雷雨に、様々な悪条件が重なり、ヒウパークとなる。(岡村、佐々木) そのサポート隊(森田・稟)
- 8月14日 降雨の中を茅への思いで脱出。サポート隊(森田・池内)に迎えられて、無事帰来。稟(サポート)、石川さん、市菅弟様。
・縦走隊(河原・杉幸) Summer Tent を出発。槍手で
- 8月15日 Summer Tent に下山。石川(O.G)さんのサニレにより、慰労コンパを行う。
・縦走隊: 槍殺生より、又又六、三俣を経て雲の平へ
- 8月16日 USK(上田山岳会)のバスにて下山。交通費はロハにおつた。
- 8月17日 縦走隊: 雨と強風のため雲平にて次殿
雲の平、太郎窪平、薬師 向山
向山直下、スゴ、越中沢岳、五色ヶ原
- 8月18日 五色、雄山、大汝山、劔沢
- 8月19日 劔沢、劔頂上、早月尾根、上雨
- 8月20日 魚津、直江津、上田に、ついでに

夏山合宿記録

★ドーム北陸 8月7日 パーティー 佐々木、栗
登攀時間 3時間40分 ガイルピッチ 3

Bバンドより取り付き 下部2ピッチは2ピッチ目のトラバースが悪いだけで単調なアブミのかけがえである。3ピッチ目は浮石が多くガぶり気味でいやな所であった。2人とも本番は初めてであったためガ。ルートフィティングがまずかったためガ。3時間40分もかかってしまった。技術不足、経験不足であることはまちがいない。ルートとしてはほとんどのクムニーの方がおもしろいであろう。岩登といふものは楽しく楽しくやりましよう。 ガイル=テロン40m. アブミ 6個、カラビナ20、ハーケン4.

記 栗

★水野クラック 8月7日 パーティー 河原、池内
登攀時間 15分 ガイルピッチ 1

新人はいつもミニエ行かされます。 記 河原

★第1尾根 8月8日 パーティー 小宮、河原
登攀時間 3時間 ガイルピッチ 11ピッチ

B沢を下るのがいやだ。取付への左側の赤茶けたセカイバンドを見のがさないように注意。初めての本番で最初は緊張するが、すぐになれる。技術的には西上田の方がむずかしいが、四角やクラックの登りがまだまだ、とにかくスッキリした岩で楽しかった。寸言 「南稜は長い」でした。

ガイル=テロン40m. アブミ 2個、カラビナ15 記 河原

★P2フランケン右(早大)ルート 8月9日 パーティー 岡村、栗
登攀時間 2時間 ガイルピッチ 5ピッチ

取付は左から2本目のクラックでまちがえ易いので注意が十分必要である。3ピッチ目のクラックはクラックに不慣れな我々にとってはいやな所であった。2人とも体調が十分でなくつかれたようでした。浮石も少なく、クラック有り、人工登攀有り、四角有り、変化に豊み、快適なルートであった。後続パーティーに先をゆずりゆっくり登る。

「下り6分の登りが4分」 寸言 でした。

ギール=テロン40ル。カラビナ10 アブミ4。

記 栗

★ フラック尾根 8月9日 パーティー 河原 佐々木

浮石が多く又、落石も多く、滑り面白くない。やはりルートネーミングとフラック登りがおきまつてあつた。人に聞いてばかりではだめだ。自分の目と足で登らなくては。 記 河原

★ 横尾本谷 8月9日 パーティー 小宮 池内

BC登り 6:25, 本谷=股 8:30 ~ 9:00 南岳 11:30, 北穂 2:30.

帰路 3:40

本谷=股から右腕カールの底より雪ケイ云いに南岳頂上よりやや北部の尾根へ出る。静かである所であった。雪ケイの登りでは調子が出ず大変であった。又新人には多少無理があつたかもしれない。下部の沢は大変荒れていた。 記 小宮

★ C. BA ゼース 8月11日 パーティー 森田 河原

登攀時間 1時間30分 ギールピッチ 9ピッチ

Cゼースは浮石ばかりでゼースなれてもいやない。又Bゼースといつてもゼースは登らずほとんど登り。左端のカンテ状の所を攀つて居るようだ。Aゼースでやっと岩らしい岩登りが出来た。右岩稜パーティーのレポートという事なのでゆっくりゆっくり休みながら登る。ネテラスでは松本の衆と会い長々と話しをしながら右岩稜パーティーを待つ。技術的には問題なし 記 河原

★ 北尾根 8月11日 パーティー 栗 池内

4山峰の登りは涸沢側に行く。クモルートをとれる。ふなり4山峰頂上にて右岩稜パーティーもながめる。他人の登攀をながめるのも良いものであるおと思つていたがガスで良く見えない。3山峰の登りは心配していた新人も感じ良く通過してくれた。俺達の時と大きな差だよ。 記 栗

寸言 "岩登りは山登りの一部である。又困難と危険は別々のものである。岩登りは「カリ」が山登りではない。" エマ大王

★ドーム西壁 8月12日 パーティー 石川、真

登攀時間 1時間45分 サイルピッチ 3ピッチ

北壁の下り10mほど下り西壁下のBバンドへとまわりこむ。フェースはおもしろいことはないとかで、着く取付は2ヶ所あり、おしい時間と食う。40mでAバンドに入つて次はムニーとクラックの中間の様な所でザックを背負っているため非常に登りにくい。安全タリトバースするところは捨縄が別困難ではない。3ピッチ目石川さんがムニーを一人出でし。もどる際捨縄を切る。ルートとして、滑石も少なく快適な所だ。初めての女性の人とパーティーを組んだので緊張したが大変スムーズに登られるのでこがあせていった。

記 真

★右岩稜 8月11日 パーティー 岡村、佐々木

登攀時間 2時間10分 サイルピッチ 8ピッチ

はじめの2ピッチは、何なく通過してテラスに出る。(60m, 30分) ニコから、約55mが核心部で、登りはじめの草付がやや不安定であるが、クラックは急にもかかゆらず、ホールドはカチリして快適である。小テラスからは一部ハンク帯あり、ヒナの掛け方を余程注意しないとザイルのすべりが悪くなる。途中、一箇所、体が空中に浮かぶ様なところがあり、ちよいと微妙なバランスを要す。(55m, 55分) コンテで10m程登り切って北壁に出る。(5分) そこで、松本の新宿partyに出会い30分待。北壁を登り、C.B.Aの森田、河原らと合流(15m, 10分)。あと2ピッチがAフェースで、右よりの興しるルートをとる。最後の出口5m程が、バランスと腕力を強いられる。(65m, 30分)。

★屏風東壁、雲稜ルート パーティー 岡村、佐々木

登攀時間(実働) 5時間55分 サイルピッチ 9ピッチ

(T4尾根は3ピッチ)

T4に着くとJMCCをはじめ3partyが続き、我々は4番目。カチリしてりたら、3番目のparty(大阪経済大学とか?)に「信太の方に追いかけては登りにくい」と先をゆすられた。T4からは凹角で上部の小ハンクをアブミで乗りこすのだが、ニコが困難である(40m)。ボサテラスからはハーケンをホールドとして使う箇所がある。ホールドは余り期待できるものかな。い。(20m) 大ピナクルからはアブミトラバースを約5m行い、快適なテラスを7m程上る。割合難しい。(25m) 扇岩からはアブミのかけかえで、何ら技術的に向題はない。ただ、全てのホールドが古く、リンクが今にも切れそう。2度と登りたことは思えない程気持ち悪い。(35m) ボサテラスからトラバースルートを取ったが、きりきりとしたハーケンにアブミをせりこみ、トラバースをする。張りつめた岩に、かかると立

ち上るところが少々狭い。更に不安定なフックで「ステップ」に立ち、小さな足場や小指程のフックや「ホルト」が上から岩が張り出して居ると相まって、チリチリのバランスを強要される。しかし、そこから、大変楽になり、3本のホルトがある快適なテラスに出る(35m、ここで「ウパーク」)。ここから、ツルツルの傾斜を「ルンゼン」と「アブミ」を頼りに登ると外斜テラスに出る。(40m)。東壁「ルンゼン」にある「ルンゼン」は雨による浸食作用で「クラクラ」にゆるみ、確認しないうちにかまると「ドエライ」になる。草付の階段状のところを35mほど上り、あと、もちろん岩溝30mを「フック」で登って終了点に出る。

(感想) フックテラスで雷雨に会い、以後4時間の待機。下の「ルンゼン」にサイルを投下し引き上げる。折から雷が落ち、草付が「バクッ」とまよった。つかまっていたヒナにヒリックときた。そのまよ、ヒ「ウパーク」するかと思っただけ、テラスが「小さすぎ」不可能なため、決心をし、トラバース。ウシロの大阪経大にヒナを置いて行きながら、快適なテラスまで着いたとたん、下から強烈な悲鳴。雨も急に降りはじめ、ルンゼンは「滝」である。従って、何と叫んでいるかは聞きとれず、事故の起ったのは確実だ。天候が午後からくす「れるの」を知って彼等は取りついたので、千クショウ。スグ「抜けられる」と思っていたのに。これ程、頭にきた経験はない。岡村氏を確保しながら降り、事故者をもう1本のドッヘル用サイルで引き上げる。トラバースで、最もイヤらしいところまで「や」つきたとき、両足にケイレンが起ったという、事件の一幕。おかげで「ポンツ」まで、しづくのしたたる程、さ、ヒ「ウパーク」だ。ところが彼らはツェルト1つしか持って居ない。塗りの無謀さがあった口から、さからない。腰ナワなども使わず、直接サイルを体にまきつけて登っている。ヒ「ウパーク」する際の注意として、ホルトに確保して「ネムレ」と何度ヒ「アドヴァイス」したが「大丈夫」といって実行したり。心配で、こちらが「1晩中起き」出したのに彼等2人は「クニ、クニ、スヤ、スヤ」。岡村氏と顔を見合せて、そのムチャクチャ主義にアキレ返った。翌日、サポート隊が「タイミング」よく我々を迎えてくれたのが、合宿中で、もっとも印象深い、嬉しい思い出となっている。

山は大きい

人間は小さい

されど山は大きい

団結だ!!

5. 1966年道山合宿縦走

8月12日 須沢より雨樋経由で Summer Tent
に行かんよすも、この雲行あやしくなり、天狗の
コルより岳沢に下る。案の状、前樋の登山口あ
たりで猛烈な雨となり、Tentに着いたときは
全草すぶぬりであった。出発(8:45) →
奥穂(11:00) → ジサンダルム(11:40) →
天狗のコル(12:50) → Summer Tent(5:00)

13日 Tentの掃除をしながら定着での疲水
を取る。杉本上田よりTent到着(5:30)

14日 起きると小雨だった。杉本雨具何も持た
ず、何んとか調達して出発するも少々頭
くさる。やがて雨も上り、涼しい雲空の下を快調
に歩む。殺生小屋では水代1人40円との
事なので、Tentでもらった(美11美11サ1性7(元)
ピスケットもくらゝ7樽7(まう。出発(6:50)
→ 明神(7:20) → 穂沢(8:05) → 横尾(9
:06~23) → 一の俣(10:05~20) → 槍沢小屋
(11:20) → 殺生小屋(2:30)

15日 今日も又小雨模様だ。早朝、暗みに
じよじてお水をしっけいに朝飯を作る。
槍の肩からの雪りは復線になっており、五分
下まで数珠つなぎ、頂上ではガスの湯も何
も見えず。双六〜三俣間は水いたる所に
有り、黒部源流で小キジをうつ、この小キ
ジがやがて雪気をおこし、工場を動かす、雪
車もはしらせ、平野の人々の生活に潤いを

えるのか、思うと感^じ無量であった。出発(5:25)→肩の小屋(6:05)→稗頂上(6:20)→双六(10:00~20)→三俣(17:25)→雪の平(3:00)

16日 雨と強風の為め沈没

17日 地図にて薬師の出合まで1時間と予想したが、右と左の急な下りで予想外に時間がかかた。薬師の登りで雨まじりの強風が吹く、ぶかれ、綾線浴の道を迷わず、風当りのない所を進む。疲労激しく、肉山より五方の方に雪が有りテンバ^ンと成り、右をスゴ^ゴまで行かず、ツェルトをはき、出発(5:25)→薬師出合(8:05)→左俣(9:15)→太郎小屋(10:45)→愛大遭難碑(12:50)薬師岳頂上(1:10)→テンバ^ン(3:00)

18日 昨夜、食べた物がわるが、たゞしく下痢を起し、五色までで羊沈とする。スゴ^ゴで日本海が見えたときは大変うれしく、越中沢岳の登りで偽ピークばかりで頂上にたかたかつけないのは辛い。出発(6:30)→越中沢岳(9:25)→五色(

19日 五色ヶ原から、石の石の坂を下りてガウ峠へ、ニカシシガ岳への登り、かなり急な登りである。これを登り切ると下を見ると、ここにも多くの残雪がある。鬼岳は登らず、右側から残雪の上をトラバースして、龍岳とのコルへ出る、約200mの登りを登れば、もうそこは浄土山が見える、富山大立山研究所から、一の越まではゆるやかな下りである。一の越はミダヶ原からの客が多く、上高地呑みの混雑ぶりである。300mの石山までの登りも人が多し、頂上も人、人、人、人……

志保山の頂上に登るとすると、頂上のまわりには柵が
 してある。オヤマー、オヤマーとよく見たら、頂上にいくには全
 50円なり。日本数ある山の中にもこんなお山がある
 のかと、頂上には登らず大汝に向う。真砂岳のカ
 ールの大きい石と、別山との向で雷雨に合ひ、こかいこ
 との上なし。スゴにあった「落雷のため即死」の遺骸碑
 を思い出す。剣沢のテンバにツリ石ときほスゴ又
 してした。発() → 一ノ越() → 志保山
 () → テンバ()

20日 前劔からの登りは続々高なまじりズットケわ
 く、しかも長い。一般の登山者はヒールシーエイ春から
 登っている。こちらは特大のキスリングでゆうゆうと登
 つていく。こんな時はまったく気持がいい。早月との合
 小路にサックを置いて頂上へ。白馬、鹿島が目の前
 薬師岳が真にリッパな姿でそびえている。はるか
 遠くに槍、穂高も見える。ハツ山が印象的で
 あった。交通費が安かつ、早く帰る事が出来るぞ
 う(体をこわしたため)と、早月を下る。2600m地帯
 にはもう冬山のための荷が(てあった。徐中ドラムカン
 のフタにたまった雨上を飲んだりしながら、フラフラに
 行って瑞馬島に着いた。出発(5:50) →
 前劔(7:32) → 頂上(8:28) → 無人小屋
 (12:10) → 馬瑞島(15:07) → 上市() →
 魚津() → 直江津() → 上田
 (10:30)

6. 係反省

6.1 装備反省

栗 妻

合宿でまわった点はマンドリンを忘れたこと、ラジオが一台足りなかったこと、グラウンドシートの不潔、ヤカンの腐った事、うまくできたことはない。

(夢の中で書く……現在の岩登りの技術者—岩登りの用具の使い方はセルデングの壁を攀じ登るための物でしょうか？岩登りで大切なものをザイル、刀、ブシなど考えているバカな野郎は我々の部には見られないが、それと似かよった考えの野郎をどこかその辺で見たいことがあったような気がしたようだ。岩登りで最も大切なことは技術は技術の問題は装備係としてどうにもならない、自分の技術の荒さは素直に認め、それを他人に転嫁しないようにしたい、トレーニングが大切であることは覚っていると思うトレーニングに次ぐトレーニングを望む。…岩登りには他のあらゆる宗教(思想)の入り余地は全くない、そんな考えをくみ込まないと思っている野郎はスカンクに食われて飛んでしまっている……ゆめい世の中がうるさくて熟睡は出来ぬ、こゝから装備の研究は十分(7)きかこの文を読んでマカヌケテイルと言う奴は子供は……もう人生の負け強をくんでいる……)

装備報告

奥良明

収入

小宮(0.3)氏より1500円……但し、これは、0²会の年間援助金としてもらった。

森田 岡村 佐々木 河原 奥 池内 → 1100円 計 6600円

杉本より 500円

合計 8600円

支出

キシフル(45円)、乾電池(160円)、H-ケン(2940円)、庖丁(240円)、石油(350円)、ホリタン(150円)、ホルト(330円)、キャントール(200円)、X9(200円)、シンポン7セット(240円)、カラビナ(3720円)、ハイレン0-7°(200円)、三角布(100円)

合計 8675円

(このうち、カラビナ1500円分は0.3より)

赤字: 75円

会計(食糧)報告

河原 洋

収入

岡村 1700円

佐々木 1700

奥 1700

池内 1700

森田 1200

杉本 1800 (650円未納)

河原 3000

飯島先生別
(カンパ) 1000

合計 13800円

支出

泉万一富士 6953円

上田製菓 5040

新雪荘 960

坂新 250

合計 13203円

カンパ 16ヶ寮にて転売

売上金 720円(未納)

13800 - 13203 = 597円は部費へ
納入する。

毎度の事ながら合宿の前になると「金がない金がない」
などとぬかす御仁が多いのにはこまったものだ。

皆さん冬山合宿にそなうて今からお金を貯め
えておいて一度にパット出しましょう。会計も

秋山合宿計画

1. 秋山の意図と合宿への提言

C.L. 佐々木史郎

Ⓐ 員が参加できるような合宿を1度は持ちたい。誰しも考えたことがあろう。同時によい山をやりたいとも思ったであろう。これら基本的な願いは総て今年度の部の方針規約の中に直接結ぶつき、これを解決するに、やはり部の方針規約に外ならないのである。これを前置きとして、秋山の計画の意図と取組み方について、少くも口添えをする。

Ⓑ す。秋山に余り知られていない裾花川周辺を取上げた理由の主なものをあげると、

- 1) よい山をやりたい……“よい山”の意味は深く、“楽しい山”“知らない山”であり、時には“記録的価値のある山”であったりする。当面、そのいずれをも満足しうる豊かな要素をもつ山は戸隠だという声が圧倒的に多い。
- 2) 全員が参加できる山をやろう……戸隠は近くて、安く、かつ楽しく行ける。時間的、経済的負担が軽くて済み、全員が参加しやすい条件にある。楽しい合宿をあじわうことができる。
- 3) 夏山の反省に残されたルートトレーニング技術、練成の好適地である。

Ⓒ て、これらの要求を満たす合宿とするために、我々はどうあたらよいだろう。それには、①各自、自分の登攀ルートを研究し、部会において充分討議し、より完全な知識を身につけ、②自覚的、自主的トレーニング(岩登りに限らず5~10分のルートトレーニングを継続してもよい)を実行し、③各係は自分の責任をどこまで精力的に負ぬき通す、④そのために、自分の分担を明確にとらせ、そこに全員を集中させ、⑤部員1人ひとりはそのための協力、指導と援助を惜しんでほらなさい。

Ⓓ 岳部は山に連れられてくれる為の組織では無い。山に行こうとする自発的な者達の“志”なのだから、当然、そこに起る困難、自ら克服してゆくという前向きな姿勢であってしかるべきだ。要するに、お互いが一寸の常識と知性を働かせれば、そこに楽しい合宿が導き出せるのだ、ということを使う。その皆さんの、一丸となった決起を望むものである。

全部員の諸君！ カンパロウ！

2. 計画概要

2.1. 場所

戸隠山、裾花川周辺

2.2. 期日

第1次合宿：1966年、10月9日～10日(3日間)

第2次合宿 1966年 10月15日～16日 (2日間)

2.3 目的

- 2.3.1 岩魚釣りと沢登り技術(ルートフィッシング技術の研修)
- 2.3.2 忍花川源流の実践探拓(記録的価値)
- 2.3.3 春山にそびえての偵察
- 2.3.4 全部員の団結意識の高揚

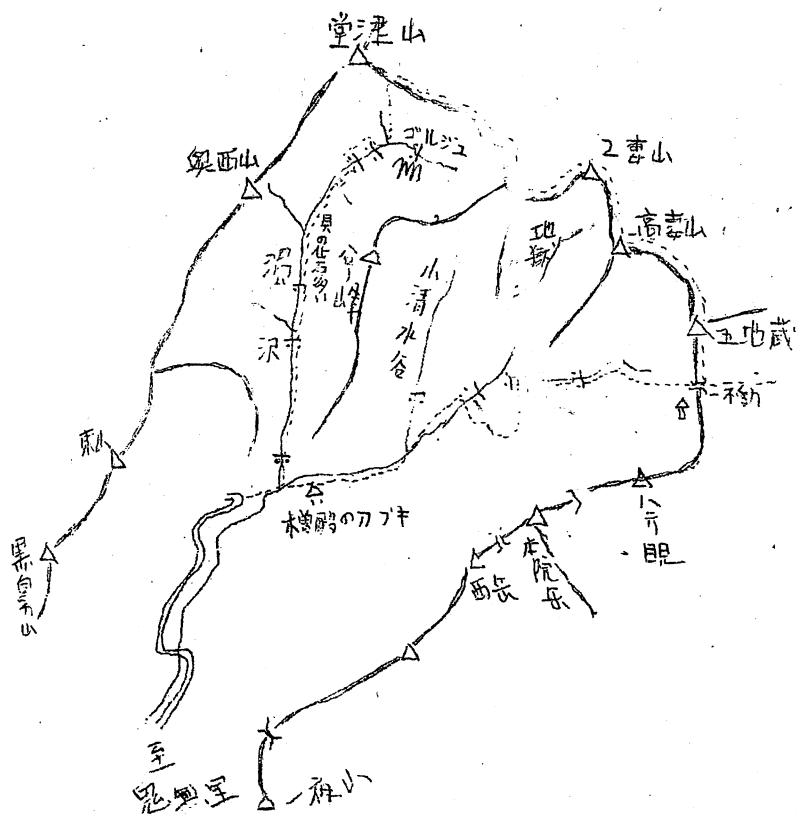
2.4 参加人員構成

—但し、第1次合宿—

岡村 紀雄(化工4)	装備 栗 良明(機工2)
須藤 昭雄(化女)	記録 杉 本 敏宏(化工2)
C.L. 佐々木 史郎(農3)	食料 市 野 勝正(機3)
食料 木村 修二(機工3)	気象 池内 寛幸(化1)
合計 河原 洋(機2)	

3. 概念図

戸長 忍花川周辺



4. 登攀計画 ~ party 編成

- Aコース (袴花川源流)
岡村(ん), 須藤, 市野, 池内.
- Bコース (濁沢).
木村, 妻(ん), 杉本.
- Cコース (地獄谷)
佐々木(ん), 河原.

5. 装備

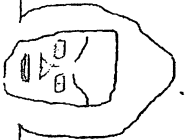
係のみにたよらず各自考え持って行くように 又各パーティーごとに責任を持って
管理好みにして下さい。食器不足につき各自用意してもらったら嬉しい事では
“天皇陛下、方才”

6. 食糧

各パーティーごとにいろいろ研究してみてください。

寝袋の中の一人言

夏山合宿では勉強不足の奴がめだつたな。
最も下手やかな岩登りのみ^{ビク}もやっつ。その結果
に満足し、自分は一流だ“な”と思ひ違えて
いるやっはないだ”らうな。岩登りをして山の毎ん
の一部を、技術を“けなら集中的にやれば”
半年もやれば”十分一流になれる。何も勉強
せず、経験(これは非常に重要で“か”)により動物
的、本能的感覺だけを心得るだけなら、あまり
に残念だ。冬山など十年いっていても同じよ
うな日は旧もないような(浪 + 理論的)知識
を身につけてより安全に登る。皆んなもこ
し、の知識を身につけよう。そして学校の勉強
もしよう。



第2回全国登山祭典参加報告

佐々木史郎

この祭典は8月24日から4日間、北ア白馬岳一帯で、日本勤労者山岳連盟、全国青年スポーツ祭典実行委員会、新日本体育連盟の主催により開かれた。オ一日、オ二日目の全体集会、分散会には、全国33都道府県から220名が参加、オ3、オ4日の記念山行には、450名前後とぶくぬろあがった。

27日(土) 晴れ

残念な代り、ヒマはあつたが経費の都合上、25日から参加できず記念山行のみ参加した。「私は未だ白馬岳を知らない。」参加しようと考えた唯一の理由だ。申し込みをしたら、「是非、Cコース3班のリーダーを……」との依頼の下に、品川、新宿の人達と寝食を共にすることとなった。Cコース約65名は4班に別れていて、私の3班は16名。400余人の人線が大雪渓とスーに切る。私は未だかつて二つような大partyを見たことがない。登山愛好者の熱烈な支持の下に登展している登山の偉大な力にただ感激するばかりだった。

疲れた仲間をいたわり、荷物をかゆるかわる持上げていく様は、幼く者の登山ならではの光景だ。雪渓を登りつめて、パッと広がるお花畑にドトウのように湧く歓声。彼らは、見ることに、聞くことに、食することに……全てに興味を示す。楽しさが一歩もなだ。

全国一千人以上の登山愛好者の大部分にまだまだ充分要求が満たされてないというハッキリした事実を適格にとらえることができた。

28日(日) 快晴

朝から晴れて絶好の登山日なり。Cコースは杓子、釜、そして釜越峠から猿倉へ下るのだ。出発直際、もう一度参加者の面々と思う。北海道から来た者。リーダーは北大山岳部O.B.だ。九州からはるばるやってきたparty。皆、すこぶる元気だ。やがてAコースの仲間の歌う「若者よ」の力強い合唱に見送られ、頂上ホテルに別れを告げる。稜線からの夕外れは素晴らしい。近くには、唐島、銅外、遠くには松や穂高が、ほるか向つにヤツ、南丁、富士などがみえる。途中一人の女性が足がつ、7歩けなくなった。顔はそう白で苦しそう。「何か食べたか」と尋ねれば、首を振る。ハハーン、ここの便秘だ。すぐ後ろから来た救護班(看護婦)と相談し、サラリン錠と与え、

交替で背負いこむことにした。登山のリーダーは喜ぶことに喜しい。精神的にも肉体的にも莫大のエネルギーを費す。数々の困難をのりこえて、無事、最後の集会場である白鳥村中守校につく。総括と行ない、祭典の幕はあろされた。

“感想”

最終日の反省会の中で渡された祭典ニュース速報“白鳥祭”の中に次のようなある長老の意見がのせられている。「……討論集会が感想としては、学園関係の発言が少なかった。学生、教師の参加が割合多かったにもかかわらず、発言の少ないのは、正しい登山運動がまだ学園の中に根をおろしていないことを意味するので、今後はもっともっと学園の中にも登山運動をひろめてゆきたい。……特に私大サークルに残存するシゴキ問題に見られるような学園サークルの封建制は依然として根強い。こういった傾向を逃避的の山行き、英雄主義的冒険的な登山を産み出している。しかし正しい登山思想をもつことにより、命も大切にす科学的な登山ができる。正しい登山思想は、困難な山登りの蓄積から生れるのではなく、社会生活と山登りとを深く密着してみつけた時、始めて得られる産物なのであると思います。そんなところにも学園における正しい登山運動が伸びやんでいる原因があると思います。……」と長々と続いている。私はこの発言に、少々シャクにされたけれども、確かにその通りかもしれないと思う。我々偉大のサークルの中にも教えきれない程指導層のシゴキにひたさずする在道への加わった運営がなされている現状を最近しばしば聞かされる度に。

その点、登山のリーダーは皆すぐれたリーダーであると思う。すぐれたリーダーとは登山経験よりも指導力、組織力、統率力にすぐれた人である。私はこれからも登山活動に参加してそのような様々な長門を勉強し、学園サークルの民主化に寄与したいと思う。

SACを理在の社会生活にマッチした活動のできる時点まで発展させるためには、我々一人ひとり加、今夏剣にこの問題を考えなければならぬ。来春、西都民のアンデス行は確定している。それに対する援助活動が何故全部員一人となった、自発的活動に発展していかぬのか。私はどうした自覚の不可能な状態に現在いるSAC運営各部活動がなされているのかという疑問を感せずにはいられない。私は登山祭典に参加する中でそのことを痛切に感じた。

登山愛好者へのよひかり (專者) 才又田全園勤者登山祭典

登山愛好者のよひかり (專者) 才又田全園勤者登山祭典
私達の登山活動は、社会生活を豊かにし、健康増進に貢献するものである。
(以下省略)

部活動を発展させるために (2)

3. なぜ山に登るか (その2)

前回は登山に行き私自身の意見と、英雄主義的登山について述べた。
「登山を証明する」といふ考えから山に登るのは、結果的には「なに
がなんでも頂上にたつ」「山で死んだら本望だ」というのと同じである。
これらは、人間の「生きよう」とする本能と否定的なものであり、
遭難の原因にもなっている。その1でも述べたように「体と心をき
たえ、世の中のためになる」ため山に登るのであって、決して死ぬ
ためではない。一人の人が遭難したら、多くの人が救助に向い、莫
大の労力と資金をつぎこんでようやく助け出せばならない。本人はた
く知らず「本望だ」で済むかも知れないが、他の人はたまったもので
はない。我々はこういう個人主義的な、非人間的な登山に絶対反対
しなくてはならない。

「逃避のための登山」というものがある。生活がきびしくなり、様々
な困難が生じた時、現在の社会の矛盾とマのあたりに見たり、社会
の発展方向がわからなくなった時、自らその道をコク服して行くので
はなく、その道を回避して小へにかぶる。そして、「うさぎをけらし」「困難
が去ったら」降りてこようという以外、この逃避登山である。我々
青年は、(特に学生は) 何事でも学んでいなければならない。社会を、困難をも
っと科学的に分析し、その道を回避するのでなくコク服するのために自
ら進んでいくなくてはならない。困難は自然に去るものではないし、
他人が無くしてくれないものでもない。自分自身で解決しなくてはな
らぬのだ。人類は困難をコク服することによって発展してきたし、
今も進歩しているのだ。「体と心をきたえ、世の中のためになる」と
考えるからこそ、登山の業1が、もうこれがわかって、社会の悪に向
って断固としていくことをできるのだ。

—フグ←

遭難対策費中間報告

遭難委員 O.B係

先に文書をもって市通知し市協力をお願いしました遭難費(上田では万円)のうち、4ヶ月という驚くべき長期にわたり、ようやく4,500円集まりました。

提出下さいましたO.B諸氏は次の通りです。

井出 邦徳	} 各 1,000円	} 計 4,500円
永島 春治		
石川 悦子		
小宮 良雄		
吉川 甲	500円	

但し、吉川氏はある事情により提出困難なりし故、お断り致しました。他のO.Bに申し訳なしとのことで、無理して500円のカンパをしていただきました。我々に対する強い市支援、市協力の気持に、部員一同、深く感謝すると共に、その喜びを分かち合っています。

なお、再度、次のO.B諸氏の市協力をお願いします。

福島 融、春田 正美、山本 利彦、大沢 正夫、高橋 洋旭、
若林 忠之、緒方 邦夫、大林 健、小宮 山晃、以上9名。

森田 稻吉郎、藤原 超、両氏からは度々、色々としり支援をいただいておりますため、この9名に含めません。その英はO.B諸氏の理解ある解釈を望みます。

遭難費として納入していただく金額：1,000円。(原則)

★(注) 1966年度予算計画を同時に参照願います。

皆さあーん、冬山の寒さより、夏山の暑さよりも、もっともつと徹しい
 試馬金の期季と存りました。あの合宿直後の苛酷な再試馬金をも
 はや忘れはすまい。我々は信州大学山岳部学生ではなく、信州大学
 繊維学部学生であることを忘れず、しつかり勉強してこの徹しい
 期季に打ち勝とう頑張れ!

又我々は信州大学山岳会に山岳部員であることも忘れなく、故に部費を払おう。Mr. Yeti

一寸上見乙落三注意

「証のために」山に在るもの

その中で日本の登山界の現状

(1) 都岳連問題と山岳協会の現状

我が国には 1200万の登山大衆が存在するといわれています。その中で山岳協会に打撃されている山岳会は数多、5万人といわれています。日本山岳協会は今年度、協会一本化という事で、JACにも全日本山岳連盟が統合されるので、協会やその傘下の山岳会の方針は、政府、独占資本のスポーツ政策を忠実に実行しようとする日本体育協会の影響下にあり、圧倒的多数を勤労登山者の立場を考えた活動をしている山岳会が数多くありますが、殆どの山岳会は勤労登山者の状況に合わない面を多く持っています。それではその状況に合わない面はどのようなものであるか、主な点を上げてみます。オチに組織が一部の登山ボスに握られており、全会員や未組織登山者の立場に立つた、民主的大衆的運営がされておらず、オチに何れも登山者の体に合わない、科学性のない山歩きトレーニングを行っている。その極端な形としてシゴキが現われている。

オチに、登山を個人的なものであるとか、無価値なものであるとか考えたり、逃避的気持ちで登る誤った思想性のない登山観が根強く残っている。要約すれば以上3点ですが、ここでは残念ながら詳しく述べられませんが、都岳連

問題をとり上げて山岳協会の現状について述べてみます。これは都岳連の人事運営をめぐって若手登山者の団から不満が爆発し、日本山岳協会会長と波及した、組織の民主化を要求した内紛問題です。この問題はすでに昨年からくすぶり続け、今年2月5日の日山協中評議会をへて表面化しました。同評議会

員会が決定した新常務理事18人の内、都岳連関係の10理事に対して、徒歩会流、山岳同志会登嶺会など有力20団体が適任ではないとして不信任をかけた辞退勧告をつきつけにそのです。この20団体は、(岳連を刷新し協力する会) と呼び、都岳連の(官僚的独善性、少数団体の首脳による非民主的人事運営)

指摘、日山協の常務理事10人に対して同様に誤りを一つだけながら日山協理事になるのはけしからんというその。この刷新グループはその後、10人が無視した態度に出たのを見て、4月21日の都岳連評議会にて「上層団体の役員になるには、理事会の推せんを要す」と改正し、さらに10人に辞任を迫りました。

その結果、5人が辞表を出しましたが、残る5人は強硬にはあつきました。又日山協の評議員会が都岳連からの動き、信任していない5人を信任する新たな5人を入れかえてほしい」を不採択却下、怒った都岳連が「要望が認められなければ今後いっさい日山協には協力しない」という強硬な声明を出したもので

す。以上この問題を概要しますが、その背景も持っているものとして、都岳連の組織上の問題も述べざるを得ません。まず都岳連には加入が多すぎそのために

この部は、まず、平野の自費で、登山用具を揃え、登山会として、山岳方面
に活動して、登山者の増加を期す。そして、登山部は、登山者ロウに上っ
たこの外はいないはず。彼が、こうして会長に就任したから、毎年、50万
円を寄付する。という条件でその持ちを買取ったからです。辞任要求のけて
、5人(高橋定昌、高橋忠、星野、鎌田久、藤沢豊喜)も戦前は登山の
中、理事教練も先頭に立って持ち込んだ人達です。又役員構成にしても登山連
の理事45人中、正式に選ばれているのは13人、あとはすべてホスガ自由で自分の
得意の者がたつた者を選ぶという依拠理事です。こうした非民主的人事、運営は
組織にも反映され、役員は文部省や体協の御意見伺いし終始し、登山大衆に目
を向ける姿勢はまったくありません。この問題は登山人口130万、山岳会教
2000余と、1月1日の中で都岳連加盟は1級100、2級100、高次80(おほい)
という組織現状にあると思います。圧倒的多数の登山者が組織とされる指導者
なく放置されている現状に對して、眞検に考える対策を(とはいかざり)絶対
解決されるべきの新しい問題なのです。そしてこれは単に都岳連に之を伝える
ではなく、日本の山岳団体、登山界全体に對しても之を伝えることであり、又秘達、
山を愛する登山者の(ひとりひとり)眞検に考えるべきは、何ら新しい問題なのです。

次回は、その1)日本登山界の現状の勤労者の切実な登山要請。

2)縮小する 登山の本質的原因。

3)登山活動に對する政府、文部省の干渉。

1966年度 予算計画

①支出(購入)予定

㊦ サイル(テロン、11mm X 40m)	13,500円
㊧ コンロ(石油、カンロ 各1)	8,600
㊨ fix用クレモナ(6mm X 100m)	6,000
㊩ 月報発刊費	17,700
㊪ サークル運営費	5,000

計

50,800円

★説明

㊦ サイル……部に現在4本のサイルがあります。しかし、残念なことに核心部
に、管傷を有し使用可能はテロン40m 1本のみです。眞山合宿に
際し、サイルがなければ合宿ができません。ある部員のたすかえで復
購しました。

㊧ コンロ……部に残存する2つのコンロは昭和20年代のもので、部品は
すでに製作廃止にされています。1台はノズル穴が大きくなり、火力を
強めることができず、他は、ノズル基部からガスが漏れる。合宿に
際しては、

(※) 装備係が奪回してくれますが、それにより事故を起す。事故のない登山(年間方針でもあるか)を切に望む。我々としては是非購入しなければならぬ品です。

② 既用クルマ……冬山、春山用。部員、合宿費にむくと余りにも高いのでO.Bの援助が必要。

④ 月報発刊費(月平均)

紙(1000枚)	400円	} 1,475 × 12ヶ月 = 17,700円
原紙(12名)	1200	
その他消耗品	30	
発送料	825	

⑤ サークル運営費

部員の交通費など、部の活動方面に当然、必要と部会にて承認されたものについてサークルはこれを許可する。

② 予算対策

① 自治会より	10,000円
② O.Bの援助にむく	22,500
③ O.B会援助の遺計基金の残金	3,500
④ 部費より	10,800
⑤ 大学祭にてアルバイトを実施する	4,000

計 50,800円

★ 説明

① 自治会に28100円(サークル、クルマなど)の要求をしておりますが、教養統合でこちらにいく予算も少なくなり、1万円位が妥当な線だろう。

② O.B 1人当り1500円の布協力で、 $1500 \times 15 = 22,500$ 円

③ 遺計費、納入分(4,500円)と未納分(9名の方)をあわせて13,500円だから。

④ 部員数9名、部費月額100円、 $900 \times 12 = 10,800$ 円

⑤ 大学祭に祭の石店街にオチン屋を出す。4000円以上には確実にむくが、残金は冬山偵察の援助資金とする。

⑥ 現在、部費のみを頼りとする運営で、経済的基盤が弱く、これでは、いくら理論技術の学習練習をし、部の再建につとめようと、やがて部活動は停止してしまいます。皆様の布協力を要請します。

9月現在

◎ 提出者

石川悦子 1500円
小宮良准 1500円

◎ 未納者(是非お願いします)

福島融、春田正美、藤原超、山本利彦、
大沢正夫、高橋洋旭、若林忠之、緒方邦夫、
井出邦徳、大林建、小宮晃、永島春治、
森田浩吉郎

編集後記

皆さん大変ゴリッペな御覧見に少々驚きました。又原稿の集まりも大変悪くごまきました。これは期限まで下必ず提出して下さい。それがないと編集が大変ごまります。

これはあくまでも部報でありますから直接部員に關係ある投稿を次回に望みます。

よりよい部報発刊のため力を合わせていきましょう。

発行年日 1966年9月16日

発行所 信州大学山岳会 上田山岳部

長野県上田市常入500

発行所代表 佐々木 賢 郎

編集者 Mr. Pyeti

☆

山からの贈物

高村光太郎

山にありあまる季節のものも、
遠く都の人におくりたいが

おくりうとするとももたない

山にいてこそ取れたこの草もいっし
果もいっし茸もいっしが

今では都に何んでもあつて
金がものをいっすだけといふ

それではいっす

旧盆すぎで穂立をくろえた萱の穂の
あの美しい銀の波にうちわたる

けさの山の朝風を

この封筒にいっすい入水す

香料よりもいっすい白の初秋の山の朝風を

